

ネギアザミウマ

ネギアザミウマは、アザミウマ目アザミウマ科に属し20を超える系統があり、日本全国に広く分布します。本虫の発育は非常に早く、野外では年間5～7回、温室では年中世代交代を繰り返します。夏季は2～3週間で1世代が終わり、高温少雨で多発する傾向があります。ネギ、タマネギ、ニンニク、アスパラガス等のユリ科をはじめ、アブラナ科、イネ科、ウリ科、カキノキ科、キク科、クワ科、ナス科、バラ科、ブドウ科、マメ科、ミカン科等極めて広範囲の植物に寄生加害します。

また、TSVW（トマト黄化えそウイルス）やIYSV（アイリス黄斑ウイルス）を媒介し、前者はトマト、ナス、ピーマン、キク、トルコギキョウ等に、後者はネギ、ニラ、タマネギ、トルコギキョウ等にウイルスを感染させます。

1. 生態

（1）成虫

雌で体長約1.1～1.6mm、体色は変異が見られ、夏期は黄色系、冬期は褐色系の個体が多くなり、ネギの株元や雑草地で休眠せずに越冬します。葉内に産卵し、気温が高くなると早く成虫になるので、繁殖力は旺盛になります。卵から成虫までの期間は20℃で20日、25℃で16～17日程度です。

（2）幼虫

成熟すると体長0.7～1mm、体色は黄白色で体形は成虫に似ていますが、翅はありません。1齢、2齢を経て地際部で蛹化します。（20℃で7日）

2. 被害（長ねぎ）

成虫、幼虫ともに葉に寄生し加害します。アブラムシ類のように吸管を持たず、葉の表皮を舐食し吸汁するので、食害痕はかすり状の小白斑となります。葉が折れ曲がった部分や葉の基部に多く分布し、高温乾燥下では葉身全体に広がり急激に増殖します。一旦多発してしまうと防除効果が上がりにくくなり、特に空梅雨や夏季高温時には注意が必要です。高温期に収穫する夏～夏秋穫り作型では、多発すると生育が停滞したり、カスリ状の白い食害痕により等級が下落しやすくなります。水稻との複合経営の場合、稲刈り時期に防除の間がつつい空いてしまうと本虫の個体数が増えやすいので注意が必要です。



3. 防除対策（長ねぎ）

（1）薬剤防除例

- ①定植時（4月、5月）にスタークル／アルバリン顆粒水溶剤を苗箱灌注すると、生育初期の発生抑制に効果があります。（富山県、鳥取県）
- ②土入れ、土寄せ時に粒剤を株元散布します。
（例：ダントツ粒剤、アルバリン／スタークル粒剤、ベストガード粒剤 等）

③夏季は本虫が急増するので、異なる系統の薬剤をローテーション散布します。効果を確認し、感受性低下が疑われる場合は他系統の薬剤を散布します。被害葉から白紙に本虫を落としてみると確認が容易です（写真）。

※合成ピレスロイド剤は感受性の低下が確認されているので避けます。

※近隣のタマネギ圃場は発生源になりやすいので、5月に防除をします。



（2）耕種的防除例（複数の方法を併用します。）

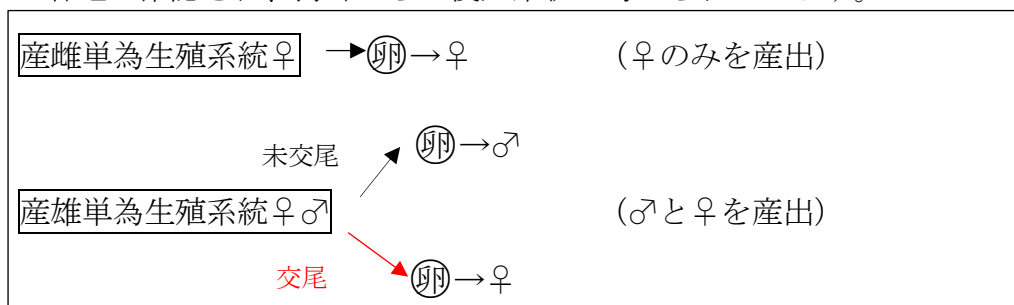
①寄生植物が多岐にわたるので、圃場周辺の除草を徹底します。

②寄生した残渣は圃場外に埋設する等、放置せずに適切に処理します。

③ハウスの開口部に防虫ネットを張り、侵入を抑制します。赤色（波長 620nm～）ネットは 0.8mm 目合でも防除効果が期待できます。

4. 近年の話題（特記事項）

国内では「産雌単為生殖系統」という単為生殖を行い未受精卵から雌だけが生まれる系統がほとんどでした。ところが 2007 年以降は雄、雌両方を産出する「産雄単為生殖系統」が各地で確認され、海外からの侵入系統と考えられています。



「産雄単為生殖系統」は本県において未確認ですが、新潟県や富山県ですでに確認されています。「産雄単為生殖系統」の雌は夏季でも褐色系の体色で、雄は体長が 7～8mm で雌より小さく体色の季節変化がありません。

また、両系統には薬剤抵抗性の違いがみられます。

①産雌単為生殖系統

クローンの雌のみ産出するので、薬剤抵抗性は発達しにくいと考えられていますが、合成ピレスロイド剤の感受性が低い個体群が各地で確認されています。（香川県、愛媛県等）

②産雄単為生殖系統

交尾により遺伝子が交換され、薬剤抵抗性が発達しやすいと考えられています。

多くが合成ピレスロイド剤抵抗性遺伝子を持ち、個体差や地域差がありますが、合成ピレスロイド剤以外の薬剤にも感受性が低下している事例が報告されています。

アグロスリン、スミチオン、アドマイヤー（高知県、徳島県）

マラソン、アクタラ、アルバリン/スタークル、プレオ、ハチハチ（大阪府）

ダントツ、ハチハチ（富山県）